２０２５／０１／０５　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：衰えることを喜んだ先駆者
聖書箇所：ヨハネの福音書　３章２２－３０節

今朝、新しい一年を始めるにあたって一緒に考えたいこと、それは“衰えること”。言い換えると“へりくだる”ということです。ヨハネ３章、きょうは特に２２－３０節の内容を学んでいきますが、まずはみことば全体を一度お読みします。それぞれ神様のことばによく耳を傾けてみてください。

ヨハネ３：２２－３０

「:22 その後、イエスは弟子たちと、ユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。:23 一方ヨハネもサリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が多かったからである。人々は次々にやって来て、バプテスマを受けていた。:24 ――ヨハネは、まだ投獄されていなかったからである――:25 それで、ヨハネの弟子たちが、あるユダヤ人ときよめについて論議した。:26 彼らはヨハネのところに来て言った。「先生。見てください。ヨルダンの向こう岸であなたといっしょにいて、あなたが証言なさったあの方が、バプテスマを授けておられます。そして、みなあの方のほうへ行きます。」:27 ヨハネは答えて言った。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません。:28 あなたがたこそ、『私はキリストではなく、その前に遣わされた者である』と私が言ったことの証人です。:29 花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。:30 あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」」

謙遜であること――これは私たちにとって大変難しいものです。ピーナッツという漫画の中にもこんな物語がありました。ある日、ひとりの男の子が友人に言うのです。「僕は大きくなったら謙虚な田舎のお医者さんになるんだ。都会に住んで、毎朝起きたらスポーツカーで田舎に行って、そこで病気の人たちを治してあげるんだ。何十キロも離れたところにいる人たちを癒してあげるんだ。」持っていた思いはすばらしい願いでした。でもそんな彼が最後にこう言うのです。「僕は世界的に有名な、謙虚な田舎の医師になるんだ！」と。聞きました？かつてこの物語を記した著者チャールズ・シュルツは、人が謙虚であることがいかに難しいのかということを皮肉って、これを描いていました。

ただ、どうでしょう。これと同じことが私たち自身のうちにも見られないでしょうか？私たち自身も最初は謙虚な者であろうと心に決めて、何かに取り組みだすかもしれません。神様や周りの人たちが喜ばれることをしたいと、みずから進んで何かを始めるかもしれません。でも時間が経てば経つほど、はじめの思いから次第に逸れていって、気づけば自分自身のためになっていることがあります。最初は神様の栄光を現したいと願っていた熱心な思いも、次第に自分はこんなにも頑張っているのにどうしてあの人はとか、あの人より自分の方がよくできるのにと、ほかの人と比べることによって、最初に持っていたその熱心な思いがいつの間にか苦い思いに変わってしまうようなことがあります。私たちはみな、すぐに“自分”というものが出てくる弱さを持っています。高慢さやプライドという問題をうちに抱えているのです。そしてそれを持っているがゆえに、その結果、私たちは喜びではなくて不平不満が、感謝ではなくてねたみや嫉妬が、私たちのうちからあふれてくることがあるのです。だからこそ、ここにいる私たち全員にとって、プライドと戦って謙虚さにおいて日々成長し続けていかなければならないというのは、そのとおりでした。どんな時も自分の栄光のためではなくて、神様の栄光を追い求める者として変えられていかなければならないのです。

ある人は思うかもしれません。どうしたらいいのでしょう？と。感謝なことに、みことばは私たちをひとりにはしません。みことばはいつも私たちにとって必要な助けを、私たちがどんな時も倣うことの

できる模範を与えてくれていました。それが皆さん、これから私たちが学んでいくことです。私たちが学んでいくのは、あるひとりの人物の姿です。その人物とは、バプテスマのヨハネでした。覚えていますか？これまで一緒にヨハネの福音書を学んできた人は、ヨハネについては何回も触れましたが、ヨハネというのは並大抵の人物ではありませんでした。もしだれかがプライドのわなに陥る可能性があったとすれば、バプテスマのヨハネこそまさにそんな人物でした。歴史上のだれも彼のように、メシヤの前に先駆者として遣わされた重要な役割を担っていた人物はいませんでしたし、またイエス様ご自身もヨハネに対してこんなことばを残しておられました。マタイ１１：１１「**…女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。…**」と。これらの事実を見れば、ヨハネの高慢さを助長する可能性のあるものがたくさんありました。でも彼はそれに屈することなく、どんな時もみずから謙虚さを示していたのです。もっと言えば、彼はイエス様が盛んになって自分自身が衰えるということに、何よりの喜びを見出していました。自分が低くされていくことに、喜びを見出していたのです。いったいどうして彼はそんな態度をとることができたのでしょう？プライドにあふれてもおかしくないような彼のうちを、どんな時もへりくだらせて喜びに満ちあふれさせていたものは、いったい何だったのでしょう？きょうはその秘訣に一緒に迫ってみたいと思います。

新しい年が始まって皆さんそれぞれの心を新たにされているかと思います。新年の抱負もそれぞれもう決めたかもしれません。でもそんな新しい一歩を踏み出した今だからこそ、ひとりひとりの歩みにとって最も欠かせない“へりくだり”というものについて、自分のこととして考えてみましょう。このみことばを通して私たちがますます主を知って、すばらしさを知って、そして主と人にへりくだって仕える者と成長するための励ましになることを祈っています。

〇衰えることを喜ぶための秘訣：

１．背景　２２－２６節

ヨハネのうちに見られる秘訣を見ていく前に、少し簡単に今回の背景を覚えておきたいと思います。今回の出来事が起こっている場面、背景について２２－２６節で見て取ることができます。いったいどんなことが起こっていたのか？まず２２－２５節をもう一度見てください。「**: 22 その後、イエスは弟子たちと、ユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。:23 一方ヨハネもサリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が多かったからである。人々は次々にやって来て、バプテスマを受けていた。:24 ――ヨハネは、まだ投獄されていなかったからである――3:25 それで、ヨハネの弟子たちが、あるユダヤ人ときよめについて論議した。**」さて、今回見ていく場面には、大きな議論というものが生じていました。穏やかな話し合いではありません。２５節で登場していたこの「**論議した**」ということばには、「言い争う」とか「口論する」といった意味が含まれていました。註解書ではこのことばは、「夫婦の間で行われる議論」というふうに表現していました、皆さんの方がそれはよく知っているかもしれません。要するにヨハネの弟子たちと彼らのもとにやって来たひとりのユダヤ人との間に起こっていたその議論というのは、激しいものでした。彼らは「**きよめ**」というものに関して口論をしていたのです。その議論の具体的な内容については、私たちには何もわかりません。ある人たちはこの「**きよめ**」に関して、ユダヤ人の伝統的なきよめの儀式について話し合っていたのではないかと考えていますし、またある人たちは、イエス様が授けていたバプテスマとヨハネが授けていたバプテスマの違いについて口論していたのではないかと考えていたりもします。詳細はよくわかりません。ただ言えることは、その会話の何かが引き金となって、現状に凄い不満を抱いたヨハネの弟子たちは師であるバプテスマのヨハネのところに急いでやって来て、そしてこう訴えたのです。２６節を見るとこんなふうに書いています。「**彼らはヨハネのところに来て言った。「先生。見てください。ヨルダンの向こう岸であなたといっしょにいて、あなたが証言なさったあの方が、バプテスマを授けておられます。そして、みなあの方のほうへ行きます。」**」弟子たちは何を懸念していました？彼らは多くの人たちが自分たちの先生のところでは

なく、あとから現れたイエス様の方へと流れていくことに危機感を持っていました。覚えていますか？かつてヨハネというのは、ユダヤ全国の注目の的にあった人物でした。マルコ１：４－５にこんなふうに書いています。「**:4 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。:5 そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。**」と。ひとりふたりの話でも数十人の話でもありませんでした。ユダヤ全国の者たちが、エルサレムの全住民たちがバプテスマのヨハネのところに行ってバプテスマを受けていた、と言われていたのです。人々の関心は彼のもとにありました。そんな働きや影響力を目の当たりにしていた彼の弟子たちは、どう思ったと思います？当然、自分たちの師を誇りに思っていたでしょう。喜びや尊敬の思いを抱いて、これから先どうなっていくのだろうと大きな楽しみや期待を寄せていたでしょう。でもそのヨハネよりもあとに現れて、徐々に徐々に弟子を増やして、自分たちに集まっていた注目や人気を奪うような存在が現れたのです。その名のとおりバプテスマを授けていたヨハネのその主な働きを横取りするかのような者が登場したのです。もっと言うと、おそらくイエス様はご自分ではだれにもバプテスマは授けていませんでした。というのもヨハネ４：１－２を見るとこう書いています。「**:1 イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを授けていることがパリサイ人の耳に入った。それを主が知られたとき、:2 ――イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであったが――**」と。

少しヨハネの弟子たちの立場になって一度考えてみてください。彼らはどんな思いを抱いていたでしょう。間違いなく彼らは混乱や不満を持っていたでしょう。いや、あせりやいらだちさえ覚えていたでしょう。彼らはヨハネのことを愛していました。彼らは実際にヨハネのために時間や生活などいろんなものを犠牲にしてヨハネについて行こうとしていた者たちだったのです。これからますます凄い功績や働きをヨハネがなしていって、ますます大きな力や影響力を手にすることができるのだと信じて疑わなかったでしょう。でも、それがすべて失われそうになっていました。自分たちの手に持っていたはずのものが滑り落ちて、ほかのだれかのところに移ろうとしていたのです。ヨハネの弟子たちはどんな思いを持っていたでしょう？またそれだけではありません。今度はバプテスマのヨハネの立場に立って考えてみてください。これまで見てきたように、バプテスマのヨハネこそ、まさに人々の関心を集めていた者でした。人々の間で知られていた存在でした。神様に大いに用いられていた彼は、先駆者として多くの人たちに神様のことばを語り、町中の人たちも彼のもとにやって来てバプテスマを受けていたのです。はたから見ればその働きのすべてが順調に思えるものでした。でも、そのすべてのものが別の者が登場したことによって突然にして全部終わりを迎えたのです。

どうです？もし私たちが弟子たちの立場なら、もし私たちがヨハネの立場なら、どんな態度をとるでしょう？自分たちが自分たちのものだと思っていたものを取っていった者に対して、自分たちからスポットライトを奪っていった者に対して、ねたみや不満を覚えないでしょうか？自分が持っていた、楽しみにしていたものを失ったことに対する悲しみの大きさを覚えて失意に暮れ、それを失ったことに対する不平不満を口にしないでしょうか？ある人は「もう、忘れたらいいよ。」と言うかもせれません。でもそのような状況の中で、果たして私たちは心から喜べるでしょうか？その状況の中で、私たちは心から感謝することができるでしょうか？

驚くべきことに、バプテスマのヨハネはまさにその中にあって、喜んでいました。その状況の中にあって、変わらずに満足を見出していました。いったい彼はどうやってそのように満足を見出せたのか？２７－３０節の間で、なぜ彼がそのようにして変わらず喜びを持つことができたのか？三つの秘訣を見て取ることができます。一つずつ順番に見てみましょう。

２．三つの秘訣　２７－３０節

１）全体像を覚えること　２７節

まずヨハネのうちに見出すことのできる一つ目の秘訣、それは「全体像を覚えること」です。ヨハネは全体像というものを覚えていました。どういうことなのか？２７節でヨハネはこのように答えていました。「**ヨハネは答えて言った。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません。」**」さらっと書いています。でも、これは凄いと思いません？想像してみてください。ねたみにかられて興奮気味になった弟子たちが自分のもとにやって来て、必死に訴えるのです。そしてその訴えを聞いた時、ヨハネが最初にとった行動は何でしたか？彼は感情的になることはありませんでした。先生としての立場が危ういことを聞かされて、どうにかそれを死守しようとしてあせって対抗策を講じたのでもなければ、弟子と同じようになって嫉妬や不満に満ちた応答をするのでもありませんでした。私たちが彼と同じ立場だったらどうでしょう？周りの人たちは自分に興味や関心、尊敬を抱いていて、自分自身もこれまで多くの時間や労力を費やしていろんな面で働いてきました。弟子として多くの者たちが自分について来ていたし、神様から託された大切な務めに専心して、これまで一生懸命にやってきたのです。その自分の立場のすべてが失われると聞かされたら、さまざまな誘惑が出てきてもおかしくないでしょう。出てきません？私たちのうちにも。人々の関心や評価は失いたくない、少しぐらいは自分がなしてきたことを認められたい、少しぐらいは自分がやってきたことをだれかに感謝されたい、と。でも、ヨハネはそのような態度をとることは一切ありませんでした。むしろ彼は、失われてしまうというその現状にさえ満足していたのです。いったいどうしてなのか？なぜだったのか？鍵は２７節にありました。彼は、すべてのものは天から、言い換えると、神様から人に与えられるのだという、この全体像を正しく覚えていたのです。ありとあらゆるものは神様から人に与えられるのだということ。この全体像をヨハネは正しくは覚えていました。ヨハネは、過去に自分がなしてきたことも、今自分が持っているものも、この先与えられるものも、どんなものも同じです。ありとあらゆるものは自分が勝ち取ったものではなく、全部神様から与えられたものであると心から信じていました。全部与えられたものだと信じていたゆえに、神様がそれらを取り去られるなら、それも神様のなされる恵みのみわざなのだと感謝していたのです。もとから自分のものでないからこそ、それを神様が取られるなら、それも喜びにしていたのです。

そして皆さん、これこそ私たちにとっても欠かせない重要な真理でした。私たちが忘れてはいけないこと、それは、日々の生活の中にあって、置かれているそれぞれの状況もそう、持っている持ち物や財産もそうだし、仕事も家族も才能や能力も……そのすべてのものが、神様からの恵みの贈り物だということです。皆さんが持っているものの中で贈り物でないものはない、ということです。果たしてこのような全体像に私たちは日々心を留めているでしょうか？

思い返してみると、かつての信仰者たちはこの大切な真理を覚えていました。たとえばあのモーセもそうでした。ぜひ自分の目で見てくださればと思うので民数記１１章を開いてください。２６節からは、かつてイスラエルの宿営の中で起こったある一つの出来事が記されていました。２６－２８節「**:26 そのとき、ふたりの者が宿営に残っていた。ひとりの名はエルダデ、もうひとりの名はメダデであった。彼らの上にも霊がとどまった。――彼らは長老として登録された者たちであったが、天幕へは出て行かなかった――彼らは宿営の中で預言した。:27 それで、ひとりの若者が走って来て、モーセに知らせて言った。「エルダデとメダデが宿営の中で預言しています。」:28 若いときからモーセの従者であったヌンの子ヨシュアも答えて言った。「わが主、モーセよ。彼らをやめさせてください。」**」いったい何が起こっていたのでしょう？覚えていてほしいのは、この時ほかの長老たちはみなモーセと一緒に天幕に集まって、そこで預言していました。でもここに出てきたふたりの人物、エルダデとメダデだけは別の場所にいました。宿営の中で独自に預言していたのです。特にこの時モーセの補佐役を務めていたヨシュアは、モーセの監督の下で預言せず勝手な行動をとっているそのふたりに対して良い思いを持たなかったでしょう。ふたりが別のところで預言しているという知らせを聞いた彼は、モーセのところに来て言うのです。「**彼らをやめさせてく**

ださい。」と。彼らを止めてくださいと、自分自身の持った不平不満を口にしたのです。ではこの訴えに対して、モーセはどう答えたのでしょう？続く２９節を見るとこう書いていました。「**しかしモーセは彼に言った。「あなたは私のためを思ってねたみを起こしているのか。【主】の民がみな、預言者となればよいのに。【主】が彼らの上にご自分の霊を与えられるとよいのに。」**」モーセはどう応答しました？自分の監督から外れて勝手なことをしている者たちに対して怒りを示したでしょうか？自分の立場を敬わないような者に対して憤りを覚えたでしょうか？いいえ、そんなことはしませんでした。彼は喜んでいました。このふたりが神様によって用いられていたということを、彼は感謝しただけでなく、ほかのすべての民も同じように主の霊が与えられればいいのに、とそう願っていたのです。モーセは、自分のものにしたいなどとは考えていませんでした。モーセは人々の関心やスポットライトを自分に向けようとはしていませんでした。モーセは神様が働かれること、そこに喜びを見出したのです。自分がどうであろうとも神様がいろんな人たちを用いられること、そこに感謝していたのです。だからおもしろいと思いません？ちょっと飛ばしてこの流れで１２章にいくと、モーセという人物について３節でこんなふうに言われるのです。「**さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。**」と。モーセは謙遜な人物でした。謙遜な人物というのは、自分に焦点を向けているのではありません。ほかのだれかに焦点を向けていました。神様が働かれることを喜びとしていました。モーセは非常に謙遜な人物だったのだと。

これ以外にもまだいます。例えばパウロもそうでした。今度は新約聖書Ｉコリント３章。パウロとコリントの教会との関係を覚えています？言うまでもなくコリントの教会は、いろんな問題を抱えていました。その一つの大きな問題は、教会の中に起こっていた分裂でした。本来なら同じキリストにあって一つとされているはずの信仰者が、それぞれの考えや好みに従って、私はパウロに、私はアポロに、私はケパに、私はキリストにつきますと。そのようにして自分たちの望んでいるリーダーに従って、互いの間でねたみや争いが起こっていたのです。教会の人たちは人間の指導者に自分たちの誇りを見出していました。忘れてはならない存在を忘れていました。だからこそ皆さん、コリントを読んでいくと、パウロはそんな人物たちに対して、同じ真理を繰り返し繰り返し述べていくのです。よく見てください。まず、３：４－７までこんなふうに書いています。「**:4 ある人が、「私はパウロにつく」と言えば、別の人は、「私はアポロに」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。:5 アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰に入るために用いられたしもべであって、主がおのおのに授けられたとおりのことをしたのです。:6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。:7 それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。**」と。またちょっと進んで、今度は４：６－７にこう書いていました。「**:6 さて、兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロに当てはめて、あなたがたのために言って来ました。それは、あなたがたが、私たちの例によって、「書かれていることを越えない」ことを学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して高慢にならないためです。:7 いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。**」パウロが言わんとしていたことは明白でした。神様のためになすどんな小さな働きであろうとも、それぞれが持っているどんなささいなものであったとしても、そのすべてはそもそも神様のものだというわけです。あなたには何かもらったものでないものがあるのですか？全部もらったものだということです。自分たちのものではありませんでした。だからです、皆さん。もし私たちが恵みによって与えられたものを、まるで自分の力によって手にしたものとして考えているなら、それは、みことばが教えていることと相反するということです。与えられているものを自分の、と思っているのなら、それは何だと思います？それを“高慢”と言うのです。

改めて立ち止まって一緒に考えてみてください。私たちは自分自身が持っているもののすべて、自分自身に与えられているもののすべてが、そもそも自分のものではなく神様の所有物であると覚えているでしょうか？私たちの救いも同じです。私たちの救いも、自分たちの努力や良い行いによって勝ち取ったものではありませんでした。恵みによって、キリストにあって、与えられたものでした。救われたあと私たちがなしていく主の働きも、働きをするための賜物も私たちが自分たちの力によって手にしたものではありませんでした。恵みによって、キリストにあって与えられたものでした。それだけではありません。それ以外のものも同じです。ありとあらゆるものは神様によって造られました。だから私たちの財布に入っているお金も、銀行に蓄えている財産も、家や車というものも、あらゆる持ち物も、そもそも全部が神様のものなのです。ある人は言うかもしれません。「いやいや、それは違います。それらは自分が働いて手にしました。だから私のものです。」と。でももしそのように言う人がいるなら、よく考えてみてください。そうやって働くために必要な健康なからだをいったいだれが私たちに与えてくださっているのかということです。それも、もちろん神様でした。ですから、ひとりひとりが持っている才能であれ、学歴であれ、家族のひとりひとりであれ、友人といった人間関係であれ、健康であれ、仕事であれ、同じです。すべてのものが神様から恵みによって与えられていました。皆さん、すべてのものが恵みによって与えられているからこそ、私たちは単に、神様から与えられているその贈り物を管理しているにすぎない者だということです。そして確実に言えるのは、もしそんな管理者である私たちが、自分の持っているものを見て、自分の置かれている状況を見て、これは私に値する所有物です、これは自分が勝ち取ったものです、と考えているなら、それらが自分の手から失われていけば、必ず不安や恐れを抱くでしょう。自分の持っていないものをほかの人が持っていれば、自分の持っているものをほかの人が取っていこうとすれば、そこにはねたみや不安が出てくるでしょう。だって自分のものだと思っているからです。でも、みことばはそうは教えていませんでした。すべてのものは天から人に与えられるものでした。あらゆるものは神様の与えてくださる恵みの贈り物だったのです。だから私たちには、自分の手柄として功績として誇ることのできるものは何もありませんでした。神様が私たちに与えてくださっているものがあれば、日々の生活の中にあって手にすることができるものがあれば、救いがあれば、それは全部神様が与えてくださったのだと感謝して、喜ぶことができるということです。与えてもらっていないものがあれば、神様は自分にそれは必要ないと思って、恵みによって与えてくださらないのだと、それも喜ぶことができるということです。全体像を覚えているということ、それが喜びをもたらすために欠かせない一つ目の秘訣でした。

２）自分の役割を覚えること　２８－２９節

次に二つ目に見て取れる秘訣は、「自分の役割を覚えること」です。続きの２８節にこのように記されていました。「**あなたがたこそ、『私はキリストではなく、その前に遣わされた者である』と私が言ったことの証人です。**」と。覚えていますか？以前に見たいろんな箇所でも、ヨハネは繰り返し口にしていました。１：２０で彼はこう言いました。**「私はキリストではありません。」**１：２３を見ても「**…「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。**」１：２７を見ても「**その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」**」と。ヨハネは繰り返し繰り返し口にしていました。「私はキリストではありません」と。ヨハネの弟子たちは何も聞かされてなかったのではありません。彼らは最初から自分たちが従っているその師のことばを、最も間近で聞き続けてきました。師の役割が途中で変わったのでもありません。最初からず一っと同じでした。やって来られるキリストのために道を整えてあげる、ただ人々の目をキリストに向ける、それがヨハネに与えられた唯一の役割だったのです。本来ならこれまでずっと一緒にいた弟子たちこそ、ヨハネのこの目的を知っていたはずでした。でも彼らは間違った期待を抱いていたからこそ、本来目を向けるべきお方を忘れていたのです。弟子たちは、ヨハネが「ずっと見ておきなさい。」と言っているそのお

方を見ることができていませんでした。だからヨハネはまた彼らに言うのです。２８節で言われていましたね。「私はキリストではなく、その前に遣わされた者です。あなたがたこそ、私がこう言い続けてきたことの証人ではないですか。」と。ヨハネは、周りがどんなに自分のことを持ち上げようとしても、自分の姿を忘れることはありませんでした。ヨハネは自分のもとに来る弟子の数がどんどん増えていく中にあって、自分がスポットライトを浴びたいと、本来の目的を忘れることもありませんでした。彼は最初から最後まで自分自身の役割というものを覚えていたのです。

しかも皆さん、彼はただそれを覚えていただけではありません。ただそれを覚えて嫌々やっていたのではありません。与えられた役割を心から喜んでいました。続きを見てください。２９節でヨハネはたとえを用いてこんなふうに言います。「**花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。**」ヨハネは自分のことをここで「花婿の友人」として描いていました。ご存じの方もあるかも知れませんが、この当時ユダヤの結婚式においては、この「花婿の友人」というのは、付添人として重大な責任が与えられていました。友人は単に花婿のさまざまな必要を支えてあげるだけではなくて、式の計画を担ったり、準備をしたり、時には経済的にその結婚式がうまくいくようにと支えてあげることもありました。結婚式を始めるにあたって、花婿の友人はすべての面で滞りなくいくようにと備えて、そして花嫁と花婿にとっての最高の晴れ舞台を整えるという、そんな役割を担っていたのです。そしてその役割を終えれば、当然すぐに自分の身を引きました。それが花婿の友人に託されていた務め、また特権だったのです。

皆さん、この役割を持っている者をちょっと想像してみてください。もし、そんな役割を担っていたはずの花婿の友人が、いつまでたっても式の中心に居座り続けたらどうでしょう？花婿のためにすべてのものを整えてあげるはずの友人が、登場した花婿を横に押しのけて、私を見てくれ、と人々の注目を必死に集めようとしていれば…。花嫁と結婚しようとしているその花婿に腹を立てて、嫉妬や不満を口にしながらその式をどうにかして妨げようとするなら…。私たちがそんな光景を見たらそんな友人に対して何と言います？おそらくこう言いません？「早くどいてください。この結婚式の中心はあなたではありません。」と。そして、これこそがまさにヨハネが弟子たちに言わんとしていたことでした。彼は「花婿の友人」として、自分に与えられた役割を覚えていました。そして花婿であるイエス様が実際に表舞台に登場した今、自分の役割はもう終ったということをわかっていたのです。間違いなく彼は、弟子たちが訴えているように、表舞台に留まり続けようとはみじんたりとも思っていませんでした。むしろ自分ではなくて称賛を受けるべきお方に、神の御子に注目が移り変わったということを自分のこととして感謝していたのです。自分が注目されるのではなくて、本来受けるべきお方が現れたから、進んでその方に舞台を譲って、すべての人々が唯一の救い主であるこのお方を信じ従っていくことができるように。そして、そのことを自分の最高の喜びとしていたのです。ヨハネは自分に与えられた役割を覚えていました。

では皆さん、私たちはどうでしょう？私たちは、私たちに与えられた役割を日々覚えているでしょうか？焦点を向けるべきお方に焦点を向けさせているでしょうか？感謝なことに神様は、今の私たちにも、ここにおられるひとりひとりにもさまざまな働きを与えてくださっています。救われた者たちは、かつては敵として歩んでいました。でも、救われた者たちはみなキリストのすばらしさをあかしすることのできる、キリストの大使として、キリストの証し人として今を生かされています。それだけではありません。私たちはみなひとりひとり、家庭にあっては夫や妻としての役割を、親や子としての役割を、学校や職場にあっては働き仕える人としての役割を、いろんな務めを与えられています。皆さん、その務めは、神様が恵みによって与えてくださっているものです。どうでしょう？そうやって神様から託された働きに対して、管理者として忠実であろうとしているでしょうか？神様から与えられた大切な

働きを、神様のためになすことを喜びとしているでしょうか？バプテスマのヨハネはイエス様の道を整える先駆者として、そんな声として、自分の役割を全うしました。そして役割どおりに人々がイエス様を見上げたことを、彼は自分のこととして喜んでいたのです。私たちも自分の役割を覚えているということ、それが喜びを見出すために欠かせない二つ目の秘訣だったのです。

３）キリストの偉大さを覚えること　３０節

　そして最後三つ目に見て取れる秘訣は、「キリストの偉大さを覚えること」です。全体像を覚えて、自分の役割を覚えるだけではありません。私たちは愛する主の偉大さというものをずっと覚えていることが大切でした。最後に３０節を見てください。このように書いています。「**「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」**」ここで皆さんに注目してほしいことばがあります。それは、「**なければなりません**」ということばです。気づかれたと思いますが、ヨハネはこの箇所で「なることが好ましいです」とも「なることが時々あれば良いです」とも口にはしませんでした。言い換えれば、彼はここで何らかの提案をしていたのでも、何らかの勧めをしていたのでもなかったのです。彼は「そうしなければならない」と絶対的な必要性を訴えていました。私たちはこの３章をずっと学んできているのですが、ここで興味深いのは、もうすでに２回これと同じことばが使われている場面を見ました。どこか覚えています？「しなければならない」と。ヨハネ３：７にまず一つ目が出てきました。「**あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。**」「**新しく生まれなければならない**」と。もう１カ所３：１４にこう書いていました。「**モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。**」「**人の子も上げられなければなりません**」と。罪人はみな新しく生まれるほうがいいですね、ではありませんでした。神の国に入るためには、すべての人たちが新しく生まれなければなりませんでした。人の子は上げられたほうがいいですね、ではありませんでした。救いを備えるためには、人の子は十字架に上げられなければならなかったのです。

　そしてこれらと同じように、皆さんこれらと同じように「キリストはさらに盛んにならなければならず、私たちは衰えなければならない」と言われているのです。つまり皆さん、キリストが盛んになっていくことと、私たちが衰えていくというのは、私たちに与えられている選択肢ではありません。そうならなければならないと。これが、すべての信仰者にとって求められる生き方なのだというわけです。キリストの偉大さがますます大きくなって、自分たちはますます小さくなっていくように。キリストの支配というものがますます広くなっていって、自分たちはますますその支配のうちに身をゆだねるようになっていくように。キリストの栄光がますますほめたたえられて、自分たちはますますへりくだった者となっていくようにと。それが求められていることでした。もちろんこれは、私たちが嫌々ながらするのでも、しぶしぶするのでもありません。私たちが何か自分に対して「自分はへりくだらないといけません、衰えなければいけません。」と朝から晩まで言い聞かせ続けるのではありません。私たちにとってへりくだるための鍵は、私たちがいつもどんな時もキリストの十字架を見上げ続けることでした。これはおもしろいと思いません？３章はずっと、私たちは救いにおいては何もできないのだということ、でもそれに加えて、イエス・キリストの十字架によって救われるのだということ、信仰によって救われるのだということを見続けてきました。私たちがへりくだろうとするなら、私たちはいつもキリストの十字架を見上げて、そしてそこに示された自分自身のあまりにもひどい罪深さと、そしてそれにまさる主の愛を覚えること、それを通して私たちはへりくだった者として成長していこうとするのです。ジョン・ストットというひとりの先生もこんなことばを残していました。「十字架を見るたびに、キリストは私たちにこう語りかけているようです。『私はあなたのためにここにいるのです。あなたの罪を負い、あなたの呪いを受け、あなたの負債を支払い、あなたの死の代わりに死んでいるのです。』歴史上にも世界中にも、十字架ほど本当の姿に気づかせてくれるものはありません。私たちは皆、特に自己義認において、自分自身を過大評価してしまいがちであり、カルバリと呼ばれる場所を訪れるまではそれ

に気づきもしません。しかし、十字架の御元に立つとき、私たちは真の姿にまで小さくなるのです。」そのとおりだと思いません？私たちは十字架を見上げるその時、私たちはそこに自分たちの罪深さを見ます。私たちはそこに己の無力さを見ます。罪に死んでいた私たちには、救いのためにできたことは何もありませんでした。これまで学んできたように、宗教的な熱心さも罪の赦しをもたらすことはありませんでした。道徳的な正しさも呪いを取り除くことなどできませんでした。どれだけ自分の態度やふるまいを整えたとしても、神の御怒りをなだめて負債を支払うことなど不可能だったのです。救いの道は私たちのうちはありませんでした。でもそんな希望のない私たちのために、イエス・キリストが十字架にかかってくださいました。ほかのだれでもない神様が、恵みによって、キリストにあって、救いに至る唯一の道を備えてくださったのです。

残念ながら、悲しいことに、私たちは自分自身に心が奪われて自分を中心にして、本当に誇りとするべき存在を忘れてしまうことがあります。そして皆さん、私たちがもし恵みによって救われて、日々神様が恵みによって与えてくださっているものによって生かされているのだということを忘れてしまうのなら、そこに何が生まれると思います？当然そこには、自分を誇りとする態度が出てきます。そして自分を誇りとするその態度が出てきたときに、誇りとしているその自分がふさわしい扱いを受けなければ、誇りとしているその自分がふさわしい状況に置かれていなかったとすれば、私たちは喜びを失って、感謝を失って、そしてその状況の中で不満足やねたみを覚えるのです。だから、私たちは忘れてはいけませんでした。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできない」ということを、です。そしてもし私たちに、神様が恵みによっていろんな役割を与えてくださったのであれば、いろんなものを託してくださったのであれば、私たちは感謝しながら与えられた役割を忠実に果たして、そしてそれによって偉大な神様が、偉大なキリストがほめたたえられることを喜んで求めていこうとするのです。バプテスマのヨハネは、待っていたお方が来られたからこそ、自分の役割は終りましたと、そのようにして衰えることを喜びました。

皆さん、約束の救い主は来られました。王の王であるその花婿は来られました。だとすれば、私たちにふさわしい応答は何でしょう？私たちにできる最高の応答、それは、この方の前に喜んでへりくだることです。偉大なキリストは盛んにならなければならず、私たちはますます衰えなければなりません。この一年もへりくだった者として、神様に仕えて、そして人に仕える者として、ともに歩んでいきましょう。